タオルがつないだコープあいち復興支援の旅

津波で深刻な被害を受けた岩手県の気仙沼地区（大船渡市，陸前高田市，住田町）で復興支援に取り組むコープあいちは，10月28日から30日にかけて第一回目の被災地をめぐる復興支援の旅を行ないました（来年にかけて5回を予定）。これは被災地で復興に取り組む地元のボランティア団体から「被災地の現状を多くの人に来て見て欲しい」という呼びかけに応えたものです。

愛知から岩手へ往復1800kmの旅をし、
タオルを届けた39名の参加者たち。

コープあいちは，これまでに様々な支援活動を行なってきました。中でも地元ボランティア団体による炊き出しに食材を提供し、支援物資としてタオルを届けたことなどから、一方向の支援とは異なる繋がりができて，これらの団体や被災者たちとの間で交流が始まりました。

29日に国立公園内の碁石海岸で一緒に清掃活動をしたのは地元のボランティア団体、椿の里・大船渡ガイドの会の皆さんです。この会は今年の春に予定されていた「椿サミット」で案内役を務めるために発足したのですが，大震災で被災者の支援ボランティア活動に取り組むようになったと副会長・事務局長の佐々木紀子さんはいいます。震災後，気仙市民復興連絡会に加わってボランティアを続ける中でコープあいちから炊き出し用の食材の提供を受けたのが繋がりのきっかけとなり，さらにコープあいちから送られた23万枚のタオルを被災者に直接届ける活動から被災者との交流が持てるようになったと言います。

2日目に、参加者たちは碁石海岸清掃を行なった。

炊き出しでは，この地方では珍しいうなぎの入った「ひつまぶし」が大好評で各地から要望があったといいます。そして特筆すべきは，ガイドの会の会員が各地の炊き出しと平行して避難所や仮設住宅の皆さんを訪ねて近況や要望を聞きながらタオルを直接配布したことが支援を受け入れる被災者のこころを開き，「現地を見に来てください。周りの人に伝えてください」の声となって今回の旅行を実現させる力になったと佐々木さんはいいます。

「こうした活動でコープあいちへの信頼感が培われ，私達が仮設住宅を訪問したときに部屋の中まで案内して生活ぶりを見せてくれたのだと思う」というのは参加した組合員の

小森隆幸さん（後出）。

碁石海岸での清掃作業の後，昼食を摂ったレストハウスでも交流会が持たれました。レストハウスのオーナーは大船渡ガイドの会の会長でもある小川廣文さん。「来てくれてありがとう。ここは観光地でもあり心に残るものがあればありがたい」。そして、「ガイドの会の会員から何が起きたのか聞き、この現実をこころに刻んで関心を高めてください」と熱く期待を語りました。またレストハウスで働く渡辺久美子さんも、5分ではとても語りきれないとしながらもその体験を話しました。高さが45mもある海岸の石の3分の2まで海水が上がり，引き水で海底が見えたといいます。「私達の知っている津波は，皆さんがテレビで見る映像と違って，わかめの養殖筏が流されたり渦巻く海に飲み込まれる姿を眼前にしてすごい恐怖感に襲われたものです。当時はパニクってしまって今だ記憶は定かでない」と、津波の凄まじさを話しました。

被災体験者の話に、
参加者たちは熱心に耳を傾けていた。

午後には，瓦礫の山の撤去作業が続けられている大船渡市から陸前高田市を走りながら，車中で地元の復興に取り組んでいる方々から体験や今後の課題などについて聞きました。大船渡市の地区公民館の館長をしている近藤均さんは、雇用や事業の復活は行政の支援待ちで中々進まないこと。仮設住宅居住者への自立支援の必要や精神面のケアが必要になってきたと話していました。陸前高田市で認知症にやさしい地域支援の会の会長をしている菅野不二夫さんは，食材やタオルの支援を受けただけでなく，現地に常駐しているコープあいちの岩本隆憲さん（東日本大震災被災地支援担当）に会に参加いただき支援がどこから来たかわかるようになってよったと言います。そして実際に被災状況・復興に向けた取組みのありのままを見ていただき，愛知の皆さまにお伝えくださいと話しました。

参加者たちは、壊滅的な津波の被害を受けた
陸前高田市の被災状況を見た。

復興支援の旅に参加した組合員でプラスチィック加工業を営む小森隆幸さんは「何もなくなってしまった陸前高田の現状を目の当たりにし言葉もでません。大船渡ガイドの会の皆さんが『この現状を伝えたい。観光でもいいからここに来て見て欲しい』という気持ちがよくわかります」といいます。早

く現地を訪れたかったという小森さんは、地元愛知の中小企業家同友会に属していることから、「支援もその場限りのボランティアではなく、お互いにメリットのある事業をすれば雇用も生まれる。そんな仕事作りを通じた支援を考えている」といいます。

個人宅配を利用している組合員の浅井清美さんは、「もっと早く来たかったんです。いろんなボランティア団体に応募したのですがなかなか実現しませんでした。私はカウンセラーなので，ボランティアとして大それたこと、形に残ることをしたいのではなく，被災された方々の話を聞きたいのです。瓦礫の片付けも進み今後は被災者の話を聞くメンタルなシーンでのボランティアが必要になってくると思います」と言い，また来て被災した方々から話を聞きたいといいます。

日程

28 日　住田町、仮設住宅訪問（タオル贈呈）。鎌田水産（さんま）工場見学。夕食・赤崎町のみなさんとバーベキュー交流

29 日　大船渡ボランティアセンター（下車せず）。碁石海岸清掃，レストハウスで昼食交流。陸前高田。車中で公民館長などの話。希望の一本松、仮設店舗など訪問。夕食後地元の支援団体などと交流会。

30 日　平泉見学など。